Chapter V

次世代育成

「彩の国女性研究者ネットワーク・研究機関訪問セミナー」開催報告

2020 年 11 月 20 日、24 日の２日間に渡り、2020年度彩の国女性研究者ネットワーク・研究機関訪問セミナーをオンラインにて開催しました。今年度は、日本ピストンリング株式会社、大正製薬株式会社、日本信号株式会社の３社を訪問しました。埼玉大学及び芝浦工業大学の学生 38 名が参加しました。

11月20日　日本ピストンリング株式会社を訪問

日本ピストンリング（NPR）訪問セミナーでは、埼玉大学ダイバーシティ推進室から趣旨説明の後、NPRのエンジニアの方々の自己紹介がありました。様々な部署から、男性、女性、若手、中堅、管理職など、８名の方が案内役として参加してくださいました。高橋氏の会社概要の説明、そしてNPRの歴史をまとめたビデオを視聴した後、NPRの案内役の方が、ラボの中を、タブレット端末を持って移動し、実際に訪問者の視線で、研究・開発、製造・販売をしている製品を見せてくださいました。NPRは、もともとエンジン部品の製造を行っているそうですが、近年は電気自動車への対応や医療分野へも、その技術を活かして進出しているそうです。例えば、NPRで実際に作っている「チタンタンタル合金の線材」は髪の毛の1/4の細さで、放射線治療や検査用途としてアプリケーション探索中だそうです。同社の研究開発技術が、製品として様々な分野で使用されている説明を受け、参加者からは「世界初の細さの線材は何に使いますか」「身体に入れることのできる金属は何ですか」「ピストンリングの性能はどのようなことで評価されていますか」等の様々な質問が出ました。

後半は、エンジニアとして働く入社22年の技術企画部の高村氏が、ご自身の仕事のキャリアとライフイベントについてお話しくださいました。入社後は、大学では経験できなかった「評価」等の配属になったこと、結婚、夫の単身赴任、出産、育休、育休後の子育て等について話してくださいました。時短勤務制度やフレックスタイム制度を活用しながら、働く時間を調整しているそうです。また、周囲への相談が重要とのことで、上司に相談をしながら仕事を進め、実績をあげ、本年度、課長へ昇進されたとのことです。「女性だからと諦めたくない。働きやすい環境を作るためには周囲との連携が必要。女性もスキルを磨いて、自信をつけて昇格すべきです」と、これから社会へ出る参加者の学生へ、エールを送られました。

参加者からは、「コロナで会社が変わったことはありますか」「仕事のイメージと入社した後のギャップは？」「文系の人はどのような仕事をしていますか」「男性の育休は？」等、多くの質問が出ました。質問の内容によって、入社２年目の方が答えたり、男性が答えたり、管理職の方が答えるなど、様々な立場の方が丁寧に答えてくださいました。「大変良かった」「たくさんの質問に率直に答えていただき、NPRのイメージが具体的になった」等の感想が寄せられました。

御登壇いただいた
日本ピストンリング（株）の皆様

11月24日　大正製薬株式会社を訪問

11月24日は、大正製薬株式会社、日本信号株式会社の2社を訪問しました。

大正製薬からは、5名で参加いただきました。最初に大澤氏から、会社の概要と製薬会社で行う研究のプロセスについてのお話しがありました。今回は準備していただいた研究所内部の写真を使って、総合研究所を案内していただきました。研究棟は、普段は一般公開されていないエリアとのことで、とても貴重な機会となりました。

その後、お二人の研究者から仕事の紹介がありました。入社4年目の土田氏は、工学部応用化学科の出身で、会社では、製剤・分析研究室で分析研究を行っているとのことです。「分析研究の魅力は、未知の化合物を扱っていて、様々な評価に携わることができる」と研究の魅力を語られました。「入社当初は初めて触れる分析機器を使用するので、最初は心配したけれども、丁寧に教えてもらい、今は自信を持って分析に挑んでいる」そうです。同氏はクスリの知識は全くなかったけれども、入社してから研究を通して勉強をして、その知識・技術を身に着けたそうです。「研究所は厳しいルールに則って実験をしていて勉強になる。バックグラウンドが異なる色々な人と仕事ができるのは楽しい」と、研究所で働くことの魅力をお話しくださいました。フレックスタイム制を活用している他、週1回は着付け教室に通っているとのことで、ワークライフバランスを充実させているそうです。

入社時に安全性研究室に配属され、それ以降、医薬品の安全性の研究に携わっている、入社20年の多田氏は、もともと理学部生体制御学科の出身ですが、薬の有害作用と有効作用のバランスを見極めるため、動物試験や細胞試験を行っているそうです。「自分の関わった製品が出るのは嬉しかった」との、仕事の醍醐味を教えて下さいました。とても専門性の高い分野の研究を行っており、同研究室では、各自が各分野のスペシャリストとして活躍しているとのことです。約1年間の育休を経て仕事に復帰し、育児短時間勤務制度やフレックス制度を利用して、状況に応じた働きをしながら、子育てと仕事を両立しているとのことです。

お二人のお話しの後、2グループに分かれて座談会を行いました。参加者からは「入社した理由は何ですか」「転勤はありますか」等の働き方の質問や、「安全ではないとの結果となった際にはどうするのか」「どのような疾患の薬の開発に力を入れているのか」「魚類などの実験もあるのか」等、仕事の内容を細かく尋ねる質問など、様々な質問がありました。
参加者からは「会社の雰囲気がよくわかった」「日頃、どんな仕事をしているかがわかり、仕事のイメージが膨らんだ」等の感想がよせられました。OGの研究者のお話を聞くことができたので、とても身近に感じていたようです。

御登壇いただいた大正製薬（株）の皆様

11月24日　日本信号株式会社を訪問

次に、日本信号株式会社を訪問しました。日本信号からは、4名の研究者の方が案内をしてくださいました。最初に、人事部の樫本氏から、会社概要と事業内容についてのお話しがありました。そして、業務の内容や研修制度、キャリアパスについてお話しくださいました。研修は4月から5月にかけて、時間をかけてじっくりと行うとのことで、現場に配属されるのは6月とのことです。今年はリモートによって研修が行われたそうです。「てつあつバディ制度」という独自の制度があり、先輩社員が新入社員とバディを組み、仕事を教えるのみならず、会社生活全般に渡ってフォローをしているとのことです。独身寮を備えていること、同社の福利厚生についても説明がありました。参加している外国人学生も、説明の内容がわかるように、同社の英語バージョンの紹介動画を視聴しました。その後、女性エンジニア、男性エンジニアのお二人から、仕事の内容とキャリア、家庭生活についてのお話がありました。今年度から課長になられた入社28年の女性の課長からは、入社後から交通システム技術部の開発業務に携わってきたこと、そして近年では、自動運転の課題に取り組み、実証実験を行っているとのお話がありました。2年間の内閣府への出向を経て、今年度から課長になられたとのことです。3人のお子さんを育てながら仕事をするには、助け合うことが必要で、現在は充実した環境で仕事に取り組んでいるとのことです。「勉強は社会人になっても続いている。大学の勉強も仕事に役立ちます。」と、大学生の皆さんへ、今の勉強を大切にすることをお話しされました。

入社12年のCBTC技術部の男性社員からは、無線式列車制御システムの開発・実験をして製品化していること、そのマーケットは海外に広がっていることをお話しくださいました。CBTC技術を有している会社は日本の中でも数十社しかなく、同社はその技術の最先端にいるとのことで、ソウル、北京、インドのデリーやアーメダバード等の地下鉄のシステムを支えているそうです。機械システム工学科を卒業後、同社に入社し、2年目には、海外に1か月駐在してシステム開発に従事していたそうです。CBTCが低コストで大容量輸送に向いているシステムであること等、同社の技術について、熱く語られました。現在は、子育て中で、同社は子育てに理解のある会社だと感じているとのことです。

参加者からは、「とても役立つ内容だった」「幅広く社会に貢献している研究を行っていることがわかった」等の感想が寄せられました。

お忙しい中、本セミナーの準備をして下さいました各社の皆様、本当にありがとうございました。

本学の障がい学生支援の取組が、障がい者のための

大学のチャレンジ・バリアフリー

支援の内容

物理的環境への配慮	●車いすのキャスター上げの補助 ●段差への携帯スロープの設置 ●図書館や実習室などの施設・設備の改善 ●使用教室のアクセスしやすい場所への変更
意思疎通の配慮	●手話通訳　●ノートテイク ●授業でのディスカッションのサポート　●補聴システム ●シラバスや教材の点字・拡大資料の提供 ●事務手続きの際の代筆　●必要書類の確認の補助
ルール・慣行の柔軟な見直し、変更	●治療などによる学習空白の生じる学生への補講の実施 ●サングラス・イヤーマフ・ノイズキャンセリングヘッドフォンの着用許可 ●早期のレジュメ配布、教育実習棟での学外実習時の配慮

学生支援課長
片桐 届実 氏

難を抱える学生をどう理解し、どのように関わるか」をテーマに、学部の垣根を越えた勉強会「SUダイバーシティランチミーティング（研究・教育エンパワーメント編）」が開催されました。各学部においても、障がい者支援をテーマにFD（ファカルティ・ディベロップメント：大学教員の教育能力を高めるための実践的方法）研修会を実施しています。

また、ジェンダー平等や性の多様性を学んでいる学生が中心となって、ダイバーシティ環境整備の一環として学内の障がい者用トイレのあり方について議論を重ね、「みんなのトイレ」ピクトを作成・設置しました。その存在と意義を広めるために、学内のすべての多目的トイレにピクトを設置し、「埼玉大学みんなのトイレプロジェクト」活動を推進しています。

スタッフの皆さん

一方で、さまざまな課題にも向き合っています。ダイバーシティ推進室長の田代美江子氏は今後の取り組みとして、「大学に内在するさまざまな可能性を発展させ、①学生のダイバーシティへの主体的な活動を支援し拡大していくこと、②障がいのある学生の理解に全学的に取り組み、全教職員の力を結集すること、③地域とのつながりの中でバリアのない社会の構築に貢献すること」をあげています。

そして、学生生活の支援業務を担当する学生支援課長の片桐届実氏は、「発達障がいの学生への支援として学生ピアサポート組織をつくること、さらに支援を必要とする障がい学生が気軽に立ち寄れて学生スタッフと交流できるラーニングセンターの設立を考案中です。誰もが平等に大学生活を楽しんでもらうためのサポートを実現していきたいです」と話しています。

埼玉大学の全学をあげた今後の取り組みが注目されます。

身体障がい者用駐車場

点字ブロック

スロープ

「みんなのトイレ」ピクト

「みんなのトイレ」プロジェクト活動報告

SUダイバーシティランチミーティング

00

就職情報誌クローバー2020年秋号に掲載されました。

全学一体となって、障がい学生支援に注力。

埼玉大学 ダイバーシティ推進室／学生支援課／教育企画課

ダイバーシティ推進室副室長
幅崎 麻紀子 氏

副学長（ダイバーシティ推進・キャンパス環境改善担当）
田代 美江子 氏

障がい学生のニーズにきめ細かに対応

埼玉大学の障がい学生支援の歴史は古く、1980年代に両下肢障がいの学生が通学できるように、「自家用車での学内入構」「身体障がい者用駐車場の整備」「玄関スロープの設置」などを行ったことに遡ります。そして、大学だけではなく学生が中心となって、学内の支援にとどまらず地域の障がい者を支援する活動を行い、障がいのある人が地域で暮らすための介護保障を行政に要求する運動も行ってきました。

今年度は、「ダイバーシティ宣言」を策定し、多様な人々の人権が尊重される「多様性（ダイバーシティ）」の理念と、誰もが安心して学び、働き、活躍できる機会を保障する「包摂（インクルージョン）」の理念を、大学のすべての取り組みの礎としています。この宣言によって障がい学生への支援は、全教職員と学生が皆で取り組むべき事柄として位置付けられました。

現在、約14名の障がい学生に対して、障がいが理由で学生生活に支障が出たり、学びの機会が損なわれることがないように支援を行っています。本人からの申請に基づいて、授業や実験、実習をはじめ、さまざまな機会に平等に参加して学びを深められるように、障がいの特性や困りごとに応じた支援に努め、配慮をスムーズに行っていくために、本人の了承を得た上で関係する教職員と情報を共有しています。

修学上の支援は「物理的環境への配慮」「意思疎通の配慮」「ルール・慣行の柔軟な見直し、変更」など、支援を必要とする障がい学生のニーズにきめ細かに対応しています。一方、就職の支援は就職に関する各種情報提供を行っています。

また、障がい学生が抱える悩みや困りごとを伝える場所として、各学部の支援室、なんでも相談室、保健センター、埼玉大学統合キャリアセンターSUなど、幅広く相談窓口を設けています。気軽に相談できる窓口として、障がい学生と支援を行う教職員や学生も利用しています。

ダイバーシティ推進室副室長の幅崎麻紀子氏は、「障がい学生支援は学内全体の問題です。支援を求める側も支援を行う側も一人で悩みを抱え込んでしまわないように、まずは気軽に相談に来てもらえる環境づくりに努めています」と、相談の重要性を強調します。

「みんなのトイレプロジェクト」活動を推進

同大学の障がい学生支援の特徴は、学生と教職員一人ひとりが問題意識をもち、全学一体となって連携・協力しながら支援に取り組んでいることです。

昨年度は、障がい学生支援の知識の習得を希望する教員が主体となって、「困

ダイバーシティ推進室の応援する学生の活動

埼女会

ダイバーシティ推進室では、学生の皆さんが実施するダイバーシティの推進に関わる活動を応援しています。

新入生対象
「安心・安全な学生生活のための講習会」

目的

大学生活のスタートアップ講座として、大学生活で出会う友人と対等でお互いに尊重し、より良い人間関係を築けるように、特に親密な交際関係に起こりうる暴力による支配関係「デートDV」を知る機会を提供し、フェアな人間関係の基礎スキルを身に付けさせる。自分の身や大切な人を守るため、そして安心・安全な関係を作り、充実した学生生活を過ごせるように受講させる。

主催

学生支援課、ダイバーシティ推進室、
さいたま市男女共同参画推進センター

講師

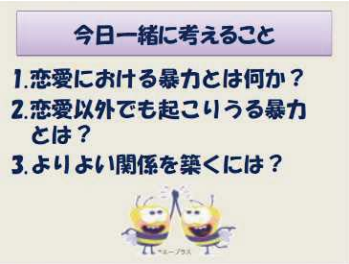
（一社）エープラス　吉祥眞佐緒　氏

受講

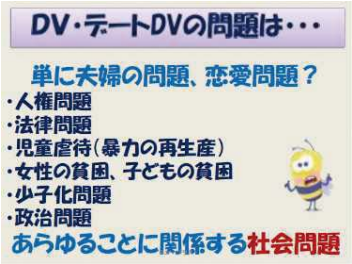
2020年8月1日～9月13日
Web学生システムにてアクセス
※オンラインのため全学部学生を対象

内容

①今日一緒に考えること



②DV・デートDVの問題は…



③フェアじゃないな…

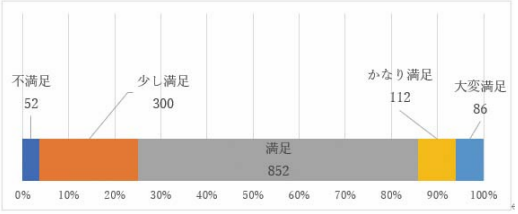
※一般社団法人エープラス資料を引用

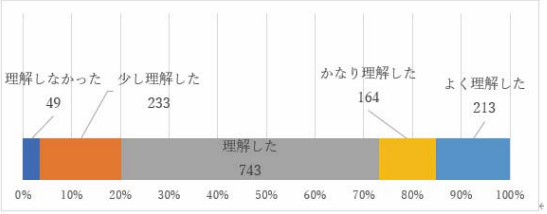
受講後のアンケートまとめ

（1）方法　Web学生システムによる無記名回答方式

（2）回答数　1,402人
＊男性833人、女性534人、どちらでもない / 答えたくない　35人
＊1年537人、2年364人、3年257人、4年216人、その他28人

（3）講演会内容の満足度、理解度





（4）学生の感想等の一例

- よく嫉妬や束縛は良いことのように語られたりするけれど、そのような風潮がデートDVの被害を言い出しづらい環境を作っているのかなと思いました。
- 暴力を受けるのを自分のせいだと思い込まない強い心と、対等な関係を保つために自分の言葉を持つ勇気の大切さに気付かされた。
- 好きだから何をしても良い訳ではない、自分がしていることが愛という名の暴力になっていないかを客観的に見ることの大切さを知っていることが対等な人間関係を保つために必要なことだと思いました。